

# はなしの歳時記

高村 壽一

## 消え去った風景

「わが町」の一角を占めていた建物が、ある日忽然と消え去ってしまった。取り壊された事情はあるはずだが、その風景になじんできた者の心にぽっかり穴を空ける。

東京に長く住む米国人社会学者マイク・モラスキーさん（一橋大学教授）は、かつて住んだことのある西荻窪を数年ぶりで見かねたところ、変化を目にして衝撃を受けた。二軒の建物が消え、殺風景な駐車場になっていたのである。

エッセイ『呑めば、都』（筑摩書房）に書く。「二軒は、駅の北口から徒歩二、三分のところにあつた庭付きの質屋である。蔵の形は古風ではあるが、コンクリート製のので全体としては『渋い』とは言い難い。それでも、あの蔵は何十年もそこに建っていたおかげで町の光景にもよくなじみ、それなりに味わいがあった。また、ちよつとした異空間として周辺に風情を加えていた。さらに、樹木や小さな竹やぶを含む庭が緑の少ない駅周辺を豊かにし、単なる通行人にとつても、目の安らぐ一角として町に確

かな貢献を果たしていたと言える」。

もう一軒は、質屋から遠くないところにあつた大きな屋根瓦で外観が目を惹く銭湯で、優美さに威厳もあり、テレビや映画のロケに使われていた。その銭湯が、敷地内の庭とともに消え、高層マンションに化そうとしていた。

経営不振か、相続税対策なのか。モラスキーさんは「東京中歩き回つても稀にしか見かけられない風景」を惜しみ、「区、都が買い上げ、文化財として別の目的のために再利用することの方が住民および都民の（公益）につながるはずだった」と残念がる。

一方、東京・銀座では、古い面影を残そうという動きが広がっている。1丁目にある1920〜30年代の洋館、高層アパートなどは堅牢で現役。地元の人たちや古い銀座ファンには保存してほしいと声が上がる建物だ。ギャラリーに転用したり、改装したりして「歴史の重さを感じながら大事にしていきたい」という所有者の声が報じられている。

建物が、伝統ある教育機関の関連施設である場合、その改廃にはよほど慎重でなければならぬ。建物自体の価値はもちろぬのこと、利用した施設は、そこで若き日を過ごした人々の、ほかには替えられない尊いものだからである。母校建築群の残像は卒業生の心に刻まれ、生涯の想い出となり、建学の精神のシンボルとして励まし続けるからである。

先頃、東京女子大学のキャンパスから、「日本近代建築の父」と称されるアントニン・レーモンドによる建築群の一部（東寮、体育館）が老朽化を理由に消えた。構造物補強措置などによる保存運動が起き1万人の署名も集めたが、卒業生有志の熱い思いは届かず、解体を避けなかった。

3年半に及ぶ保存運動のリーダーだった卒業生藤原房子さんは、「(大学当局に)将来の発展のためをとお美しい言葉を重ねられ、喪失感はありません」と、「喪われたレーモンド建築」(運動記録集、工作舎)に記す。

「ホンモノは『残さないでよかった』ことは一度もなく、『残してよかった』か『残せばよかった』しかない。同窓生で作家の永井路子さんが寄せた言葉だ。

(武蔵野大学名誉教授)